

令和5年度 教員養成フラッグシップ大学フォローアップ実地調査報告書

教員養成フラッグシップ大学推進委員会

大学名	兵庫教育大学	調査日	令和5年12月14日(木)
調査委員	山口 宏樹 委員(主査代理)、高橋 純 委員(大学担当)、白水 始 委員、 木村 国広 委員、若江 眞紀 委員		

大学関係者(責任者)からの説明

(取組の進捗状況)

- ・フラッグシップ大学として、「自律した学習者を育てる教師の養成プログラム TEX —アジャイル型手法を導入したカリキュラム開発—」と称し、先導的・革新的な教員養成プログラム・教職科目の研究・開発を行っている。
- ・アジャイル型手法を導入したカリキュラム開発を行っている。
- ・新・教員養成スタンダードの策定により、e-ポートフォリオや資質・能力ごとのGPAが可視化システムにより、「学生・新任教員・自律した学習者を育てる教師」とカテゴリーごとに学習者観・学習観の転換、インクルーシブ教育の理解、教員採用試験受験率の向上等をフォローしている。

教職員との意見交換

- アジャイル型手法を導入したカリキュラム開発は、スモールステップで科目開発ができるためやりやすい。
- 大学教員の学習観の転換について、これまで授業科目に関して他教員と意見を交わす機会がなかったところ、勉強会の実施を通じて、教員間のコミュニティも成長してきたとのこと。
- フラッグシップ大学に選定された感想や変化について、新科目の開設は負担となる部分は多いが、自大学が教師教育・教科教育の先端を走っている自負があることや、この取組は大学の研究にもかえってくるとの感想があった。
- フラッグシップ大学の取組により、最終的には教育行政、学校現場が変化していくことへの期待に対して、大学より、コンソーシアムを構成している大学・企業にも参画してもらうことを検討していること、また、大学を卒業した教員が学校現場に波及させていくことで、教育行政や学校現場にも展開していくとの回答があった。
- 学習観の転換に関するコミュニティについて、1回目の読書会には教員14名、全体で26名の参加があった。今後は、他教科にも活かす教科づくりについても検討がなされる。これについて、長期間となれば参加する教員はいずれ疲れてしまうため、一定程度の目標を設定したほうが継続でき

るとの助言があった。

- 2 単位科目を 1 単位科目へ変更することについて、他教科教員も思うところはあると思うとのことだが、学生ファーストの観点で考えることが大切であり、教員間でもその観点は共通認識が図られているとのこと。

附属学校の授業・施設等の見学及び附属学校教員との意見交換

- 教職員から研究に焦点をあてた取組の説明があった。
 - 1) 附属学校と連携した科目開発を行い、STEAM 教育を軸に取り組んでいる。校舎の改修等のタイミングで、STEAM ラボを設置。
 - 2) 学校種間の連携を実施し、小・中学校の STEAM 教育に係る研究大会を同日に開催予定、幼小連携も加速化している。
 - 3) 附属のガバナンスとして、附属学校のミッションビジョンを学長の指示に基づき作成。教員確保、予算、働き方改革などの種々課題はあるが、大学と一体感をもって取組んでいる。
- 学生は STEAM の授業見学や教育実習で来校することが多い。
- 大学と協議のうえ教育実習の見直しを図った。具体的には、17 時に実習を終了し、学生自身で考えて工夫出来るような実習とした。実習が早く終わることにより、教師が自身の校務が出来るようにした。
- 附属学校としては、モノづくりをとおして、社会や生活を知り、体感しながら、イノベーティブなマインドを醸成することを子ども達に学んで欲しいと考えているとのこと。
- 教科を超えた交流がされており非常に有効。
- こども園等との共同授業を検討している。
- 大学と附属学校の連携について、ICT 活用の面では助言等をいただいている。また、STEAM 教育については、企業から大学を通して附属学校に連絡が来る流れとなっている。
- 附属学校からフラッグシップ大学に直接意見を言う場はある。

学生との意見交換 (○：委員、■：学生)

- 算数の教員になるために入学したか。
 - 当初は幼稚園教諭を志望していたが、入学後に小学校教諭になりたいと思うようになった。
- 兵庫教育大学がフラッグシップ大学になったことで変化があったか。
 - フラッグシップ大学だと知らなかった。これから先 STEAM 教育は重要だと感じるため、認識するきっかけになって良かった。
- 「今まで受けてきた授業」と「これからやっていかねばならない授業」が違うことは認識しているか。
 - ・今までは、知識詰め込み型。これからは生徒自身が主体的に学ぶ授業形態に変化するため、それを

サポートできる教員が必要になると考える。

・生徒が自ら問題を発見し、主体的に学んでいく授業形態になると思う。

○学びをアシストする教員が必要になるとの発言があったが、現在その部分をどのような授業で学んでいるか。

■・実習での学びが一番大きかった。講義で身に着けた知識を実習で実践することで、課題が鮮明になったこと、講義だけでは得られない経験ができたことは非常に良かった。

・ICT 機器の活用法について、現場の先生が実際に使用している姿を見て具体的にイメージできるようになった。

○取得予定の免許はなにか。また、自身の人生を変えた授業はあるか。

■・小1、中・数学2種、家庭2種。

・小1、技術・家庭1種。

■大学には今まで触ることができなかった機器がたくさんあるため、やってみたいことの幅が広がった。

○全ての大学が兵庫教育大学のように、STEAM を学べる機会や新機器を使用できるような環境が整備されているわけではない。未経験の学生も大勢いると思うがどう考えるか。

■機器の活用について教えられるような教員になりたい。新機器に触れていないからと言って損得は無く、それぞれの得意な部分を生かしてければと思う。

○附属学校に行く頻度はどれくらいか。

■3年の教育実習、ゼミで授業見学を3回ほど。1・2年次はコロナ期間で訪問できなかった。

○目指す教師像について、入学前と現在で考えが変わった部分はあるか。

■・入学前から変わらず、生徒に寄り添える教師になりたいと思っている。ただ、大学の授業を通して、学校現場での授業の在り方も変化していくため、生徒が成長していくのと同時に教師も成長していく必要があると感じた。

・今までは曖昧な理想で幼稚園教諭を目指していたが、目指す教師像を考え直すきっかけになった。年々なりたい教師像が増えている。

○違う分野の学生と交流する機会はあるか。

■サークルで色々な話をするところがあり視野がひろがった。

連携先機関の担当者との意見交換 株式会社アワーズ（ア）、株式会社リタリコ（リ）

○兵庫教育大学と連携する企業側のメリットについて、STEAM 教育の観点で色々な角度から検討してもらい、様々なヒントをもらうことができた点（ア）や障害のない社会の実現をビジョンに掲げている中で、将来教員になる学生にも今の段階からビジョンを共有できる点（リ）が挙げられた。

○教員養成学部以外の大学との連携については、いずれの機関も実績がある。公共政策系大学院や社会学系大学に講義を提供している。（ア）

- 他学部提供している講義と、教員養成学部提供している講義についてはどの様な面で違いを出しているかについて、教員養成学部に限らず、社会を生きていくために、常に目的を持った人材に育ててほしいと考えているとの回答があった。(ア)
- 兵庫教育大学のフラッグシップ大学としての取組は、企業と連携しながら STEAM 教育やインクルーシブ教育の科目を共同開発していく点が重要な観点。大学と企業と一緒に科目を開発するにあたり、企業からは、大学に求めることとして、学生としてではなく、社会人として関わってもらいながら、積極的にフィールドとして活用してほしいとの意見や、兵庫教育大学のように、スピーディーな進捗が良いとの意見があった。

大学関係者（責任者）との意見交換

- 全体像がわかりやすく、スタンダードとそれに合わせた新設科目の創造、観の転換へ連動している。
- ステークホルダーとの連携について、民間企業の方を理事に採用することで、民間企業の視点も経営に取り入れていることができ大学組織として非常にうまく進んでいる。
- STEAM 教育に関して、連携大学や教育委員会からの意見を参考にしている。
- 兵庫教育大学で学び育った学生が教育現場で活躍できるように、受入れ側である教育現場にも変革が求められる。ステークホルダーの意見を聞くだけでなく、同じ立場で作り上げていく姿勢が重要。教育行政への働きかけが非常に重要。
大学としては、学生自身も様々な観点から知識を取入れることで、今までにない視点を得た学生が学校現場に出て行ってほしい狙いがある。
- STEAM 教育について、加西市教育委員会と連携しながら STEAM フェスを開催し、学生が子どもたちに STEAM を教える機会を創出している。
- 他大学への展開について、制度上の問題で難しい部分が多く、授業開発を一緒にというのは難しい部分があるが、ある科目で鳴門教育大学の先生と一緒に科目開発を行っている。
- 大学としては、社会の変化に対応しながら、公教育の指針を示す教育行政と一体感をもち、Society5.0 の時代に対応すべく、教員養成を抜本的に変えていく必要があると考えており、この兵庫教育大学の理念が学内に浸透している。
- アジャイル開発チームは週 1 回の頻度でラボミーティングを行い、情報の共有を行っている。アジャイル開発の良い点は、試行的に実施できる点、フラッグシップが始まる前の在学学生にも授業を提供できる点である。
- TSS の定量化した指標と学生の実感にギャップがある場合については、TSS は客観的評価であるため、あくまで省察する中でのひとつの資料としている。そのため、客観評価と自己評価のすり合わせをして自己評価能力を高めること、教員の評価方法を FD 等ですり合わせる事等が必要と認識されている。
- 授業やモノづくりで得た気づきが、今後どういったことに繋がっていくかを学習者に理解させる必

要があるため、授業間の連動性が非常に重要になってくる。ユニット単位で取得した積み上げ方式がフィットするのではないかと感じる。また、データ上で単位をどれくらい積み上げているかを可視化できれば良いとの助言があった。